

安土の伝承

ふるさとは多くの民話・伝説・史話があります。
それらは明日の安土、明日の日本文化のために、
守り伝えたい郷土の宝です。

永遠の信長、未来に見せたい 安土城再現「信長の館」

「安土」という自治体が消える。だが、「安土」の地名と歴史は永遠になくなるまい。この地に織田信長が日本最初の天下城を創ったのだ。

私は、少年時代から歴史と建築が好きだ。東京大学では建築美術を学んだし、歴史小説をいくつか書いた。

歴史の中で最も興味ある人物は織田信長。他人に推められることも教わることもなく、ただ一人の意志と独創で日本を変えた「歴史の奇観」である。その信長が、自らの美意識と政治表現を貫いたのが安土城である。

1992年セビリア万国博覧会の日本館総合プロデューサーを務めた私は、安土城天主閣の上部二層を原守原色原材料で再現した。政府部内では政策PRパネルを並べるような展示が望まれたが、そんな主張を抑え資金は民間企業にも頼み、「未来の国宝」といわれるほどの見事な復元ができた。欧州人も驚き、大賞讃を浴びた。

それが今、安土の「信長の館」にある。より多くの人々に知られ、かつ見て欲しい文化財である。



建築史家 内藤昌さん

安土町へのメッセージ

21世紀、世界は一層グローバルになると思われる。グローバル化が進めば、我々のアイデンティティ（独自性）が重要になります。

安土は、織田信長ゆかりの地。安土桃山時代の開幕の地。そうした歴史相を大切に、これからも町づくりを行っていただきたいと思っています。



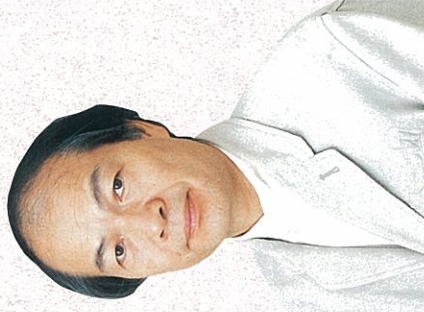
作家 堺屋太一さん

私と安土の繋がり

安土町と私の長いご縁の始まりは、教育委員会主催の模写講座の講師を担当したことからです。20年ほど前のことですが、当時の町長辻悦蔵氏が提唱された安土町文化条例がきっかけとなりました。

安土には、安土桃山時代から受け継がれている深い歴史と、華やかな文化遺産があります。それを地域の方々とともに現代に蘇らせる大きな構想があり、その実現に向けて模写講座が開講されました。絵画をとおして地域の方々との交流が始まり、今も続いています。また、「信長の館」に復元された安土城天主の建設にあたり、内部障壁画の制作をとおして参画できたことも深い繋がりとまりました。

これからも安土の優れた歴史と文化を次世代へ伝えていくお手伝いができればと考えています。



日本画家 大野俊明さん

織田信長と安土文芸セミナーヨ

それは「織田信長」がテーマの講演会を依頼されたことから始まった。

講演者は日本史と信長の専門家である堺屋太一氏・遠藤周作氏と、私・見玉麻里の3人だった。私の講演は、鉄砲とキリスト教を両手に携えて到来した宣教師「フロイス」を信長が迎え入れたことだった。信長がキリスト教を保護したためにセミナリヨ（神学校）が創立され、ミサに必要なグレゴリア聖歌が必修科目となり、これが日本の西洋音楽の幕開けになった話。当時の辻悦蔵町長がその話に興奮されて「安土」に「コンサートホールを創る」と命をかけ、「安土文芸セミナーヨ」を設立された。

安土の名とともに、誇り高く「文芸セミナーヨ」を永遠に引き継いで載きたい。



国際オルガニスト 見玉麻里さん

私たちの誇り

「安土」の地名の由来

安土という地名は、いつ頃から使用されていたのであろうか。従来は、『細川家記』の「天正四年丙子正月、信長江州目賀田を安土と改む」という記載から、信長が中国の古典をもとに名付けたのではないかと考えられてきた。しかし、『信長公記 元亀元年（一五七〇）五月十二日の条には、「安土城に中川八郎右衛門権龍り」とあり、築城以前に「安土」と称されていたように記されている。ところが、『信長公記』において、「安土」の呼称が使用されるのは、この元亀元年の条以外は、すべて天正四年の築城以後であり、天正四年以前は「常楽寺」と記され、明らかに使い分けている。このことは、「安土」の呼称が、天正四年正月中旬に築城を開始するにあたり命名されたことを物語るものと考えられる。そうだとすると、元亀元年の記述は、既成概念に束縛され、何気なく呼称を溯及させてしまった作者の誤認と考えられる。

それではなぜ信長は、「安土」と名付けたのであろうか。それは、この山が、もともとから安土山と呼称されていたためと考えられ

る。それでは、『細川家記』の伝える目賀田山という名称はどのように考えればよいのであろうか。おそらくこれは、戦国時代の末期に、この山に、佐々木六角氏の部将であった目賀田氏が権龍つたかなにかで、便宜的によばれた名称であって、古来からこの山に伝えられてきた名称でないと思われる。

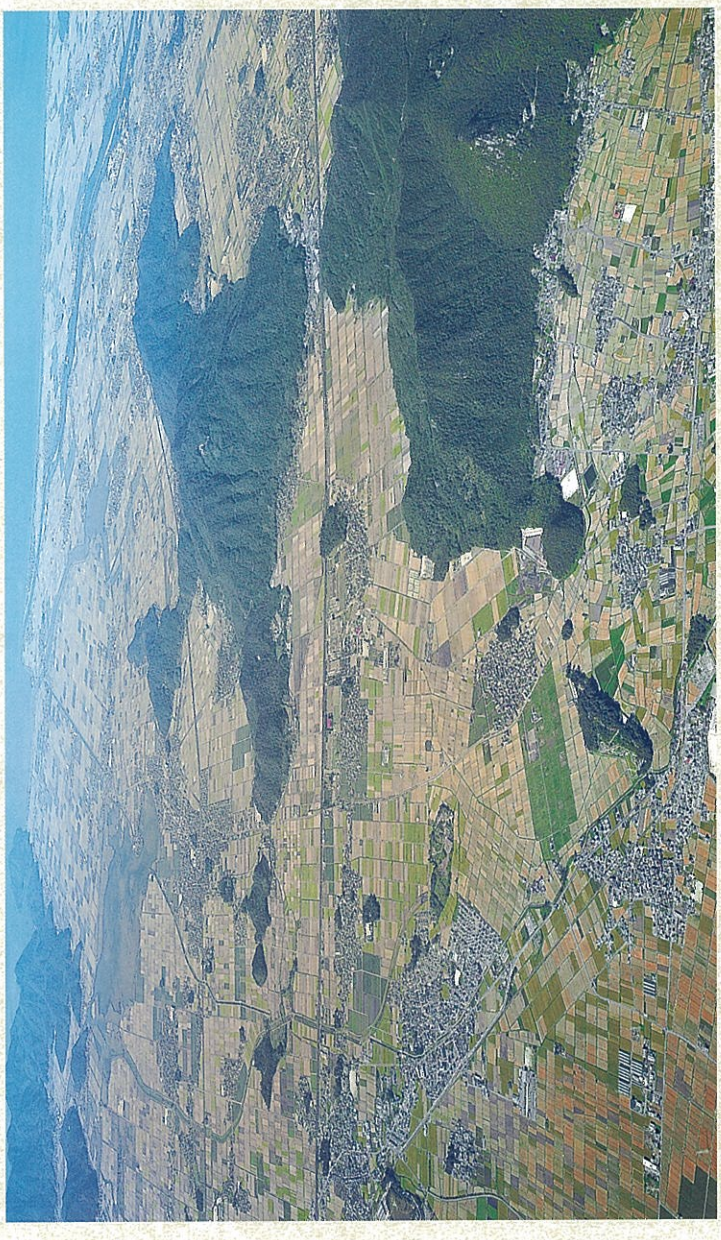
安土築城以前に「安土」の名称が記されているものに、安土城の西口、百々橋に接して鎮座する石部神社の「祝文」の一文があげられる。この「祝文」は、弘長元年（一二六二）および文明二年（一四七〇）の奥書があり、その冒頭に「吾地我峯寺神留坐……」と記されている。この「祝文」が、どれほど信憑性をもつか疑問は残るが、その内容から推して、築城以前の地元の伝承の一端を示す資料としての価値は認められるであろう。もう一つ「安土」の名称を記した史料に、東大史料編纂所所蔵の大乗院文書「豊浦郷庄横注目録（正徳）」が知られる。この文書には、二十三の寺名が記されているが、そのなかに「安土寺」の名がみえるのである。

現在、安土町内には、大字慈恩寺のなかに、小字名として「安土」の名があるが、これは、佐々木庄で豊浦庄ではないので、安土寺を

この小字名と関連づけて考えることはできない。おそらく、安土寺とは、安土山に位置していた寺の名と考えられる。

安土山には、現在、二ヶ所の地域で、室町時代頃と思われる石仏や五輪塔が散乱しているのがみられる。そのうちの二ヶ所は、安土山西麓の地であるが、そのあたり一帯は、九品寺とか大門とよばれていることや、「横注目録」にも九品寺の名がみえることから、ここが九品寺跡であることは疑いえない。もう一ヶ所は、安土城大手の右側の江藤屋敷から東門にかけての地であるが、この一帯には、須田領になるが「塔の山」の地名、庄田に「寺址」の地名が残されていることや、江藤屋敷に下豊浦の墓地があったこと、下豊浦平井の称名寺が江藤山にあつたと伝えられることなどから、安土寺は、この地域にあつたと考えられる。

それでは「安土」という地名は、どのような理由から名付けられたのであろうか。一つは、佐々木六角氏が、観音寺山に居城を構えていた頃、この山に弓の練習場があつたためといわれている。弓場をどうして「あすち」といつたのかというと、弓の練習をする時に、その標的を置く土盛を「塚」といつたためであるという。また一つ



には、この山の形が、「塚」のように三つのコブからなっているためともいわれる。安土山の東方の龍登川町の伊庭は、射場のごとで、この塚のような山に射場がつけられたともいわれている。さらにもう一つは、あづちをあすみの転訛と考えるものである。あすみとは安曇・安積などと記し、漁業や航海にすぐれ、時には製塩なども行つたとされる海神族のごとで、福岡県の安曇郡を本拠として、全国各地に分布居住している。この海神族は、その性格から、水に關係の深い場所に住んでいるが、この安土町も、かつては琵琶湖最大の内湖をかかえ、漁港や貿易港として栄えていたことを考えれば、海神族が居住していたことは十分考えられる。これらの説のどれが妥当なのか明確にしたいが、現在のところ、あすみ転訛説が有力である。しかし、「安土」を、信長以前にもあづちとよんでいたとは限らず、あるいは、「あど」・「あど」とよんでいたのを「あづち」とよびかえた可能性もある。もしそうだとすれば、また別に地名の由来を考え直さなければならぬであろう。

謂の安土は、町名であつて寺名ではない。寺名といふのは「百々」と記されべきであらう。

老蘇森と奥石神社

近江の国は、ある時（孝靈天皇五年という）、大地が裂けて湖が出現し、老蘇のあたりも一面に水が湧き、沼になつてしまった。この時、石邊大連という人が、地が裂け水が湧き出るのを止めんとし、神の助けをかりてここに多くの松や杉の木を植えたところ、忽ちのうちに生い茂り、ほどなく大森林となつた。これが、老蘇の森であるという。大連は大いに喜び、この森に水く神がましますことを乞ひ願ひ、社壇を築いた。これが奥石神社であるという。この大連は、その後、百七十三歳まで生きながらえたが、死後、老蘇より二十余町、坤の方角の岩倉山の麓に小祠を建てて祀られたという。

景行天皇の時、日本武尊は、伊勢神宮で倭姫より宝剣をうけ賜ひ、征討に向つたが、上総の海で龍神が、その宝剣をとらんとし、烈しく風を吹きすさび、波を荒立てた



奥石神社本殿

ため、倭姫尊が、日本武尊の難を救わんと、「吾、胎内に子を宿するも、尊に代りてその難を救ひ奉らん。吾が生命は滅すれども、靈魂は飛去りて近江国の老蘇の森に留まり、永く女人平産を守るべし」と言ひ、その身を海中に投げられた。龍神は、このことに感じ、金色の鷄を頭に戴き尊に奉つた。尊は、吉備武彦をして、この金の鷄を老蘇の森に埋めさせられた。この金の鷄を埋めた場所は、金鷄山と称され、いまだに老蘇の森に残されている。蝦夷征討より帰

つた尊が剣を手入れしていると、剣のなかに鎌が入つていふことに気がつた。尊は、この鎌を見て、「私を、あまたの苦難から守護してくだされたのは、実はこの鎌であつたのか」と思召され、この鎌を奥石神社の相殿に納められた。これ以後、奥石神社は、鎌大明神として崇められるようになった。

用明天皇の時、聖徳太子が近江国の処々に靈仏を刻み、伽藍を建立なされていたが、太子の妃の高橋姫が、十月に満ちても出産なされず、日を積みて悩みなされた。そこで太子が、当社に祈願なされると、その夜の夢に、如意輪観音が出現され、「この森に靈木あり、汝がみずから像を造らば、たやすく誕生あるべし」とお告げになつた。太子が夢に感じて森のかたを見れば、神社より二十余町坤の方角より、あやしき光が射していた。太子が、その

光の影を慕いて進み行かれたれば、清浄の地に白雲が覆つていた。この地にて、太子は千手観音の尊像を刻み、一字を建立された。太子は、この寺を長光寺と名づけられ、鎌大明神の本地となされた。これによりほどなく高橋姫は無事出産なされた。

その後も、たい折るに応じて靈験があつたため、国司や守護もあがめまつり、神位をすすめ給ひ、神社は繁栄したという。

※1 老蘇とは、大連が、百七十三歳に至つても、なほかくしゃくとして若者のごとくであつたため名付けられたと伝ふる。

※2 金の鷄の伝承は、多く古墳にまつて伝えられる。老蘇の森にも七ツ塚と称される古墳あり、金鷄山は、この古墳をまわつてゐる。

※3 奥石神社は、別名鎌宮とも称されるが、これは、聖徳太子の転訛したものと考へたらしい。

※4 奥石神社と長光寺山とを結びつける説がいくつもあるが、その理由は明らかでない。ただ奥石神社は、光る山と、山とて重たい山をのむ伝承があることから、あるいは長光寺山に聖徳太子の關係があるのかもしれない。

まげすの罫

永禄三年（一五六〇）、兵二万五千を率いた今川義元は、破竹の勢いで織田信長の居城清洲城に迫ってきた。しかし信長は、続々と伝えられる敗報に微動だもせず、反撃の時機を窺っていた。そして、五月十九日、今川軍が田楽御間軍を休めたと聞かぬや、直ちに全軍の出勤を命じた。

戦場に先立ち熱田神宮に祈願した信長が、「神の思召はいかに」と水楽通宝のひと握りをバツと空高く投げ上げた。するとどうである、水楽通宝はここごとく表を向いたのである。それを見た信長は「戦いは我に利あり、今川軍なにするものぞ」とさげざら三十分の将兵もどつと勝鬨をあげ、勇躍して今川軍に立ち向かっていった。



天祐神助が、折しも夕刻より激しい驟雨となり、信長軍は、敵にさとられることなく、一挙に今川義元の本陣に殺到し、ついに義元の首を打ちとつた。この因縁により、信長は、己の愛刀の罫に水楽通宝を鎮象嵌にて嵌入了が、こののは信長に向かう処敵なく連戦連勝で、ついに天下の覇者となつた。よつて世人この罫を「まげすの罫」とよんだ。

蛇石

天正四年（一五七六）正月中旬、信長は、安土築城にとりかかり、観音寺山や長命寺山・長光寺山・伊庭山などから石を引き下ろし、安土山へ引き上げた。この時、津田坊が、「蛇石」というきわめて大きな石を安土山の麓まで運んできたが、あまりに大きすぎて山へ上げられなかった。このため、羽柴筑前・滝川左近・惟住五郎左衛門の三人が、助勢として一万八千人を出すとともに、信長自ら指揮をとり、三日三晩、山も谷も動くばかりの騒ぎでやつと天守へ引き上げたという。この引上

げの時、蛇石が片側へちよつと滑り落ちたため、百五十人以上の人が下敷きになり押し潰されてしまつたといふ。

現在、二の丸の入口に径二メートル・厚さ八十センチほどの石が置かれているが、地元の人々は、これこそ蛇石であると語っている。はたしてそうであろうか。もし、この石が蛇石でないとしたら、蛇石はどこにどのようにして使用されたのであろうか。安土城の一つの謎である。

信長と常楽寺相撲

信長が、相撲を大愛好したことはよく知られているが安土築城の六年も前に常楽寺で相撲が行われたことはあまり知られていない。

元亀元年（一五七〇）三月三日、近江国中から、百濟寺の鹿・百濟寺の小鹿・たひとう・正権・長光宮・居眼左衛門・河原寺の大進・はし小僧・深屋次郎・鯉江又一郎・草地方右衛門などの相撲取りを召寄せられて盛大に行われた。

従来は、相撲といつても、土俵のかわりに人が輪をつくり、その中で投げ倒すか、人の輪の中へ押し込んだものが勝者とされたが、常楽寺で行われたこの相撲の時に初めて土俵がつくれ、土俵相撲が行われたといふ。この時、技量抜群の力士として、鯉江又一郎・草地方右衛門には、草地方右衛門を、また宮井眼左衛門には重藤弓がそれぞれ与えられたが、これは、後世の進進相撲で、三役にかのう力士として太刀と弓を与えるようになった仕来りの一番取組といふ。

なお、この時に相撲の行われた場所は、沙沙草神社北側の四の坪であつたといふ下豊浦十七にある眼左衛門という地名は、この相撲により、信長の家臣にとり立てられた宮井眼左衛門の邸跡と伝へる。

東氏と西氏

明智光秀が、信長を弑したのには、信長の冷酷な仕打ちのためといわれるが、信長のその冷酷さは、信長が竹生島へ参詣した折、勝手に城を出て常楽寺へ遊びに行った女中達と、女中達にわづらひて謝罪

した寺の長老を、ともに斬首したことなど、その例は、枚挙にいとまがない。

しかしその冷酷さの反面、信長は、多勢の人々を集めて賑やかに騒ぐことを好んだようであつた。城下や城内でしばしば催された相撲は、その第一にあげられるものであるが、その他にも、家臣たちと福引をしたり、種々の美装を凝して調馬をしたり、左義長を盛大に祝したり、ある于闐盆会には、城下の火をすべて消させる一方、天守と摺見寺に無数の提灯を掲げ、入江には松明をとばした舟を浮かせるなど、将士や城下の町人などとともに楽しんでいる。次の伝承も、信長と城下の住人の親密さを示す一つのエピソードである。

天正九年（一五八一）正月十五日、黒い南蛮笠をかぶり、眉を描き、真赤な装束のうえに唐錦のそばつぎと虎皮の行纏をつけた信長は、これも信長に負けず劣らず思いの頭巾と装束をつけた将士とともに馬に乗って爆竹を行つた。この爆竹が終つたあと、余興として、蒲生氏郷と前田利家の家中のもので、十七・八歳ばかりの青年武士が、東西に分かれ種々の競技を競つた。この競技の最中、西方より常楽寺の馬治郎という若者が、また東方より豊浦冠者義実

の子孫で伝蔵という若者が出て、太さ六・七尺（十八・二十一センチ）にも及ぶ爆竹の芯竹を振り合せんとした。この両者は、腕力には絶対の自信をもつものであつたため、勝敗は容易に決せず、そのまま芯竹は二人の振る方向へ振り潰されてしまった。これを見た信長は、深く感賞し、伝蔵に東の馬治郎に西の姓をそれぞれ授けたといふ。現在も、東親美の家には、その時の芯竹とされるものが伝えられている。

※1 小さな竹筒に火薬を詰め、それを振り回したはねたりして、次々と爆発させて鳴らすもの。

※2 馬治郎は、すべての氏名が徳業寺の住人といふが、西という姓は、下豊浦の宮井（田原村）系（田下村）に多い姓であることから、本来は、下豊浦の住人と考えられる。しかし、常楽寺の近くに馬治郎の屋敷と伝へる城があることから、いつの間にか、常楽寺に移転したのであろう。江戸時代末期から明治時代にかけて、下豊浦なら常楽寺へ移転した個人は比較的多い。これは、常楽寺が湖東平野の繁華を築き上げる拠点として栄えていたことや、のこは、鉄道が敷設されるなど、商業交通の便にすぐれていたためである。

かちどき念仏

天正七年（一五七九）五月、浄土宗の僧王念が、安土の城下町で法談をしていると、聴衆のなかにいた法華宗の信者たる建部紹智・大脇伝介の二人が、説法の座へ出て不審をかけてきたため宗論となつた。しかし、王念は、「汝等若輩のものでは話しにならぬ、師と仰ぐ人をつれてまいれ」といひ、七日間の法座を十一日に延期した。このことを聞き知つた信長は、日頃法華宗を心よく思つていなかったため、これを機会に法華宗を弾圧することをほかり、京都より頂妙寺日珙・常光院日誦・久遠院日誦等を召し、浄敵院において問答を行うことを命じた。



浄敵院本堂

た。しかし、信長は、あらかじめ判者の南禅寺因果居士に浄土宗が勝つように内意を授けておいた。

浄土宗よりは、西光寺聖譽貞安・上野最盛寺靈譽王念・同洞庫信譽が列席した。問答は専ら日珙・日誦と聖譽貞安の間で行われ、長谷川秀一・菅谷長頼・堀秀政等の奉行が、兵を率いて周囲を堅めた。問答は、貞安の答のほうの方が悪かったり、答に窮したりするなど浄土宗側にやや不利であつたが、判者の因果居士の助力により法華宗をようやく打ち破ることができた。問答に勝つたことを喜んだ浄土宗側の聴衆は、法華宗の僧侶の袈裟を剥ぎ取つたり、打擲したりした。また、不審をかけた伝介は打首にされた。

浄敵院で毎年行われる十夜法要の時、必ず「かちどき念仏」と称される念仏が、「鉦・太鼓」を響かせて勤められるが、これは、安土問答の時、浄土宗側の勝利を喜んだ念仏信者達が、鉦や太鼓など音の出るものを手あたり次第にたたいて喜び、威勢よく念仏を唱えたことに始まるといふ。念仏といふのは、本来薩摩系のものであるが、この念仏は、「かちどき念仏」と称されるように、大勢威勢がよく、浄敵院独特のものでとされている。

なお、下豊浦十七に、貞安とよ

ばれる地名があるが、これは、浄土宗側の問答者であつた西光寺聖譽貞安が、問答の功により信長より賜つた寺のあつたところであると伝へる。

桑葺薬師

太古の昔、天と地が二つに分れた後、滔々たる海上に一株の桑の木が生え出るや、たちまちのうちに、その桑の木に三個の異実が実を結んだ。そのうちの一個は、金鳥と変じて木の頂を飛び廻り、一個は、玉兔と化して枝のほとりを飛び跳ね廻つた。この金鳥と玉兔は、四天下を照らす日光・月光の垂迹であつた。残る一個は、地に落ちて山となつた。すなわち、これが桑葺寺の山である。この山のかたちは八葉にして、その色は紅紫をまじへ、あたかも天蓋のようであつたので、巖山と名付けられた。

そもそも桑葺寺は、病即消滅の靈場・不老不死の仙窟として知られるが、その由来は、次のような理由に基づいている。

天智天皇の時、近江の国に、五



桑葺寺縁起絵巻

種の靈病が流行り、多くの人々が病床に臥した。この時、天智天皇の第四皇女阿閉姫も病に罹られた。ある時、姫が天皇に、「私は、昨晚不思議な夢をみました。それは、湖の渺々たる上で、『妙音観世音梵音海潮音勝彼世間最故須常念』という波の音がしたので、私が、その波の止まる処を見んと思ひ、立ちやすろつとすると、瑠璃の光が七方に射しました。私が、その光は、七層のともしびの如くであると思つていと目が醒めました」と語られた。



桑養寺本堂

まず、姫の御覧はたちどころに平癒いたすであります。姫の見た夢はこのような瑞夢であります」と答えられた。

そこで天皇は、かの光の射した処を点じて七光寺を建立し、定恵和尚に詔して、湖上に向つて臨時の法会を修せられた。すると間もなく湖底に金色の光が見え、次第くんに光を増して浮び上つてきた。人々が、なんと不思議なことよと驚

いて湖面を見つめていると、生身の薬師如来が光明赫奕として湖上にあらわれた。これがすなわち、医王善逝であった。その薬師如来の放つ光明が、招徠として姫の玉宸の中に映るや、姫の御覧は、たちまちのうちに平癒するとともに、国中の病苦の者もことごとくこの光明にて病痛をまぬがれ不還の證果に安住することができたといふ。

こうして本願を果たした如来が、東方へ向て去らんとする時、湖中より大きな白牛が一頭浮び出て薬師如来を乗せ奉り、湖上を渡つて当山の西の磯に送りつけた。白牛、実は帝釈天の變化であるが、その白牛が龍ヶ崎の碧潭の湖に沈むと、次に梵天王が天より下つてきて岩駒と化し、如来を召し乗せて此山に飛び移った。この岩駒の飛び移った処が瑠璃石で、その石の面には、いまだに、千幅輪の跡と岩駒の跡が残されている。天皇は、薬師如来が、とどまられたこの山に、金玉の精舎を造営なされ、白鳳六年十一月六日、定恵を導師として明行田浦医王善逝を安置された。これが桑養寺である。

その後、阿闍婆姫(のちの元明天皇)は、病氣平癒のお礼に当山に行幸され、瑠璃石の足跡を拜まれ、二十あまりのすかたそなへた類むかし万人履をめる跡とこれと詠われ、寺へ奉納されたといふ。元明天皇は、諱を豊国成姫と申されるが、この山の麓の浦もまた豊浦といふ。これはすべからず、薬師如来のお導きの結果であろうか。

※1 安土山先端の地名。桑養寺はもと、安土山に建立されていたとする伝承もある。

※2 桑養寺本堂の背後の山腹にある巨岩で、その詠はきまわめてよく保つて

※3 桑養寺の縁起については、この他、定恵和尚が唐から佛朝する時

天皇は、その夢の話しを奇異に思われ、護持僧の定恵和尚を召してお尋ねになると、定恵は、「その湖は、弁才天の浄土と考えられます。弁才天は、すなわち八大龍王の變化で、その湖水の下は龍宮となっています。龍宮の海蔵には、祇園精舎療病院の本尊、医王善逝が納められております。今、都で病息が起つたのを知られた弁才天が、現身に福徳を与えんことを本願となされ、海蔵より医王如来を出されんものと思われま

す。この医王如来が、地上に出現し

桑の実を讀取して、この山に初めて植え、養蚕の方法を教へたことにはしるべき伝承もある。

なお、養蚕は「くわのみね」すなわち、くすねやすしと切り立つたもうな養蚕の實で、それがくわのみねとくわのみを詠したと考へられる。

伝内梅

建部伝内は、六角養賢に仕えて重んぜられ、諱の一字をもらつて賢丈と称したといふ。養賢が子の養嗣に家督を譲り入道するや、賢丈もまたそれに習い、剃髪し道孤と号したといふ。永禄十二年(二五六八)、六角氏が信長に滅ぼされたため、伝内は、旧領である建部郷木流(現五箇荘町木流)に蟄居したといふ。

伝内は、若年より粟田口書院の尊鎮法親王の門に入り、御家流の興儀を極め、伝内流又は建部流と称する一家を成した能書家であった。このため、その才を惜しみて、信長・秀吉ともに、家臣になら

んことを勧誘したが、「吾臣、一君に仕さず」と義を守り、それに応じなかつたといふ。ただ、信長の求めに心して、摠見寺山門の「遠京山水漫々」の額を書いたといふ。伝内は、死後、西老蘇の東光寺に葬られたと伝へるが、現在、その墓は知られていない。

この東光寺の境内に、祖先堂あるいは御霊屋とよばれる小堂があり、中に伝内の木像が安置されている。この御霊屋の前に、伝内梅



御霊屋

あるいは教訓の梅と呼ばれる紅梅の巨木がある。この梅は、伝内が筆遣を勤み、尊鎮法親王の衣鉢を得た時に使用していた筆・硯をここに埋めて、伝内みずから植栽したもので、「我が筆遣が栄えている間は、この梅の実はならぬが、筆遣衰えたれば、梅に実が結ぶであろう」と伝内はいい残したといふ。事実、毎年見事な花が咲くが、咲き終ればがくは皆落ちて実はならないといふ。このため、この梅を別名不成就の梅ともいふ。

※1 伝内は五正五年(一五八二)豊後守の祖とされたといふ。

※2 この梅は、東光寺伝内梅の母ではなく、木流の旧記法蓮寺開山の聖山にある梅のことであると見られる。

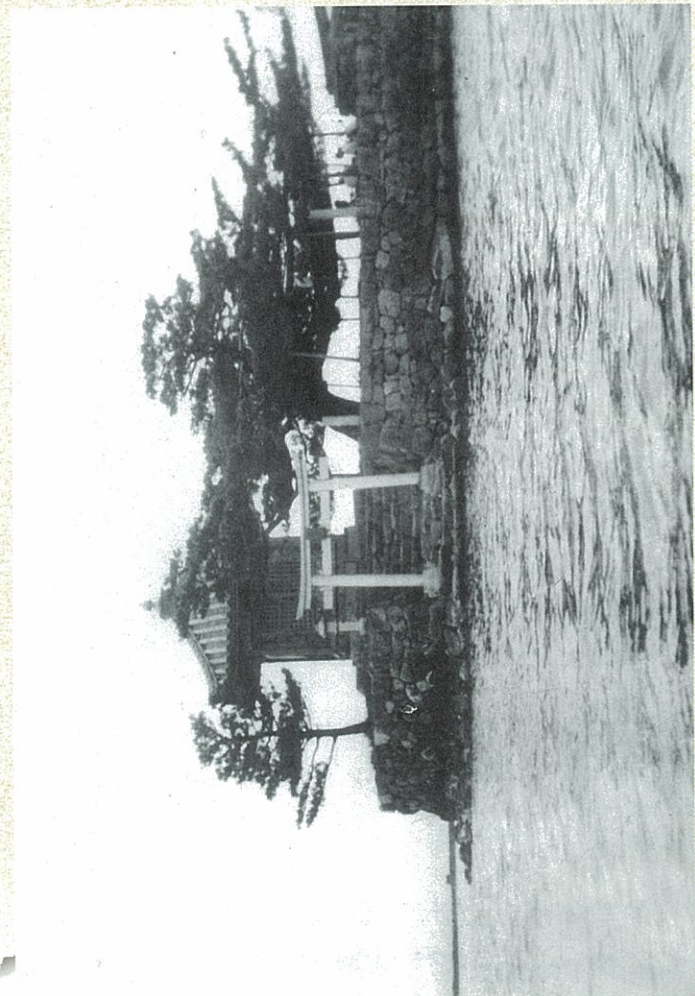
※3 梅の実がならぬのではなく、花が咲かないとする説もある。紅梅は元来結実しない性格のものであることから、花が咲かないといふのが正解であろう。

福之島弁才天の由来

戦国の群雄がいまだに各地に割拠していた天文年間、豊浦に文吉という漁師がいた。ある日、文吉

が、舟を操り漁場へ急いでいると、不意に激しい早手に襲われ、小舟は難破、文吉は湖中に投げ出されてしまった。しばらくして、気がつくくと、文吉は、内湖の砂寄州に打ち上げられていた。あのような恐ろしい早手から助かったのは、きつと神仏の加護があつたからで

あると文吉が思つていると、その夜、比叡山無動寺の弁才天が夢にあらわれ、「汝の日頃の信心の殊勝なるに鑑み、我が靈験により汝を救いしものなり」と告げられた。このため、文吉は、早速、無動寺でお守札を受け、そ



福之島弁才天

の砂寄州に小祠を建て、これまで以上に篤く信仰に励んだ。

その後、永禄二年、浪速の横堀に、米問屋を営む黒井屋勘兵衛という人がいた。この人弁才天を篤く信仰し、自家に身延山七面天女像を安置していた。或夜、勘兵衛の夢に七面天女像があらわれ、「吾を近江国安土豊浦の浜に移せ」とお告げになった。勘兵衛は不思議に思い、豊浦までくると、浜に弁才天を祀つた祠があつたが、そこにはまだ、御本尊が祀られていないことを知つた。勘兵衛がこのことを村人に語ると、村人は深く感動し、文吉の祀つていた小祠を改築し、そこに黒井屋の弁才天を本尊として安置した。そして、富士山と琵琶湖の生成伝承に因み、始め富士島と呼んでいたが、いつの頃からか福之島と称せられるようになったといふ。

信長は、法華宗をあまりこころよく思はず、機会があれば弾圧したいと思つていた。ある時、福之島弁才天の本尊が、法華宗のものと聞き及んだ信長は、この弁才天を廃祀せんとしたが、村人一同が、この本尊は、竹生島の弁才天を勧請したもので、海上安全の守護神であると答へ、信長の不審を解かしめ、そのまま据え置くことに成功したといふ。

※1 身延山が富士山に接する山であることから、身延を富士山に仮託させたものであつた。

※2 信長は、摠見寺の境内に竹生島から勧請した弁才天を祀つた。

苔穴大明神

葦の生い茂る内湖周辺は、昼でも寂しい場所であるが、とくに小字巴の苔の古穴と称される土地は、年中じめじめしている上、葦に覆われたその一角には、恐ろしく深い穴があつたため、人々は、まるで大蛇でも棲んでいそふな雰囲気、気味悪がつあまり近付かなかつたといふ。この話は、その苔の古穴にまつわる伝承である。

前九年の役と後三年の役の戦闘に参加し、勲功をあげた伴平大夫という武士が、下豊浦平井に住んでいた。その頃、苔の古穴をすみかに大蛇が棲んでいた。この大蛇が、此処彼処で頻々と悪戯をするので、村人は皆怖れ、日々の生業も手につかない状態であつた。

平大夫は人の心の鎮まることを願ひ、密かに大蛇退治に征けども、それと察したのか大蛇は出現せず、むなしく日を過ぎること百日に到つた。その百日目は、幸いに

も墨を流した如く、空は真黒闇であった。その闇に乗じて平太夫は船を出し、目的地の苔で、大蛇の出没を窺っていると、突然、西天の黒雲がゆらゆらと揺れ動いたかと思ふまもなく、日の出の如く明るくなり、前方より怪音鳴響を發し大蛇が波間に踊り出た。

その眼光是日月の如く照り輝いていたが、平太夫は少しもひるまず、先祖代々伝えられてきた家宝の鏡を揮つて、大蛇の眼に一突きあびせれば、湖辺には、大蛇ののたうちまわるような波の音と激しい血波がまき起つた。しかし、しばらくすると爛々たる涙眼は空しく消え、空は再び闇に覆れていった。

平太夫は、勇躍して村に帰り村人にこの事を知らせると、人々は大いに喜び、再び、安心して日々の生業に働けなうという。

しかし、その後、平太夫の家では、七代にわたつて眼をわずらうものが出たため、伴家では、眼を突かれた大蛇のたたりであると恐れ、屋敷の前敷に大蛇の霊を祀り、苔穴大明神と称して篤く信仰したが、ついに近年、絶家してしまつたという。

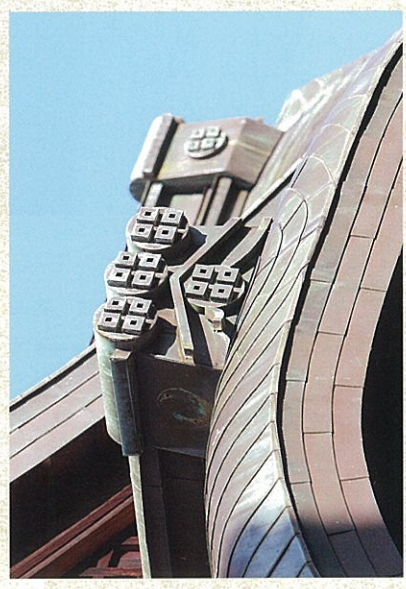
近江源氏 四ツ目紋の 目紋の

宇多天皇第八皇子敦美親王の子参議源扶義の子成頼が、長暦元年（一〇三七）五月、近江権守に任官した兄経頼に代わり、代官として近江国に下向する時、当時、宇多天皇に召されていた近江国蒲生郡の高麗長者で、時に百四十三歳の高齢にもかかわらず、精力・智謀ともに殊に勝れた長祇を従者として供奉せしめた。

近江国に着いた成頼が、国の弊や民の風俗を見るに、都に近き国にもかかわらず、風俗は悪く、仁義も知らないことに驚いた。しかも、四方を高い山にとり囲まれて中央に大きな湖をかかえているため、怪物があちらこちらに棲み、国の騒動も止むことがなかつた。そのなかでも、第一の妖怪変化の怪物は、鵜飼（今の奥島）渡合橋上に夜な夜な現れ、国中を見めぐらし、人々を悩ました。その姿態は、さだかにしがたかつたが、眼は日月の如く照り輝き、四つの眼をもつとされていた。

この怪物を見ると、人はみな心を失い、或は病に悩んだ。このため、国中の人々は怖しがつて湖を

渡ることを止め、漁師は漁を止めてしまつた。長祇は、この有様を見て、成頼へ、「この怪物は、たいへん恐い悪霊怪異であります。もし、これを退治することができれば、きつと、あなたさまの武威が國中に広がり、国が治ると思います。しかし、この怪物は、人力ではとても退治できません。神仏の加護をお求めになるのがよろしいかと存じます」と申し上げれば、成頼もうなずき、怪物の退治を沙沙貴神社へ深く祈請するとともに、日吉山王社にも立願なされ、長祇と鵜飼へ怪物退



沙沙貴神社の本殿

治に向かつた。

成頼と長祇は、怪物が首を持ち上げ、顔を二人のほうに向けるや否や、二人は、矢先きを揃えて怪物の眼をめがけて矢を射ると、矢はあやまず怪物の両眼にあたり、怪物はたまたま海中へどつと落ちた。成頼と長祇が、海中に落ちた怪物を調べると、四眼とみえたのは、実は二眼が湖面に映つて四眼に見えたものであつたことが知られた。四眼の怪物が、成頼によつて退治されたことを知つた国中の人々は、争いをやめてことごとく成頼に帰伏した。このため、近江国は平穏になり、国は治つたという。この故事によつて成頼は、家の旗の紋に「四ツ目射」をつけたという。その後、成頼は、近江国のみならず、近国六ヶ国まで治めたが、これもひとえに長祇の智謀と勇力によるものであつた。長祇は、百六十歳のときに病氣にかかり、虚木の風に折れるがごとき大往生をとげたという。

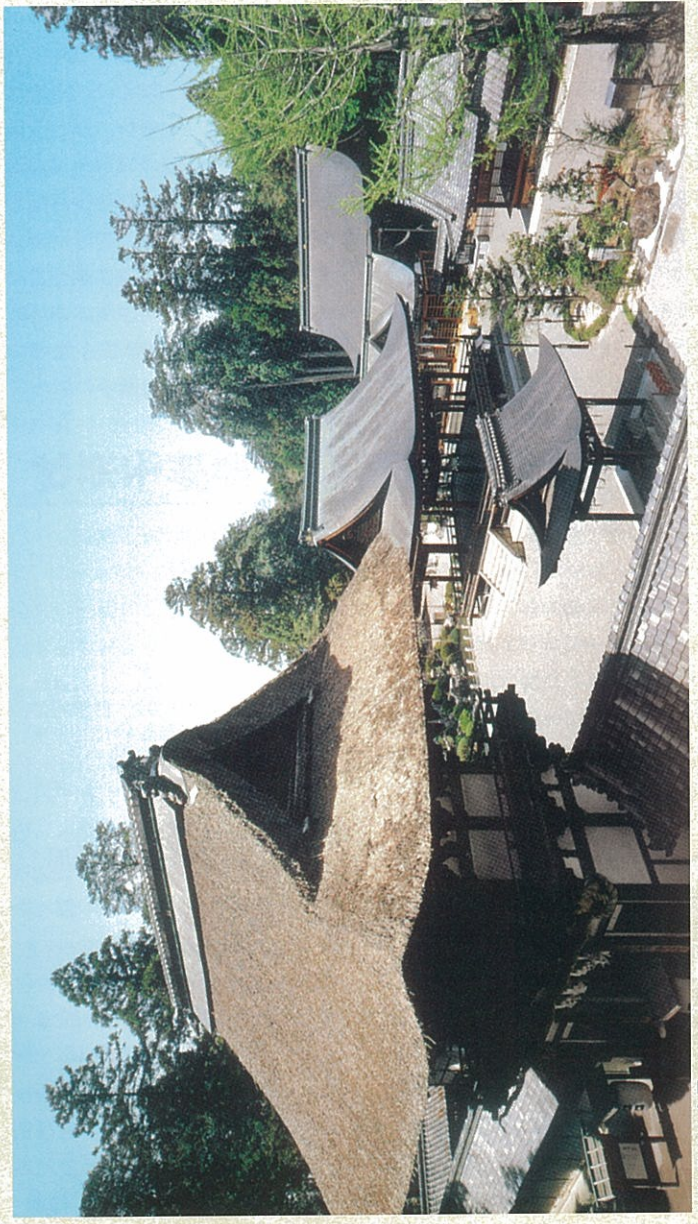
※1 江戸時代の古地図には、本殿・聖徳太子像、山王社が祀られている。

沙沙貴神社の 再建伝説

沙沙貴神社は、江戸時代の初めに大きな火災にでもあつたのか、その後、江戸時代の中頃に至るまで社頭の再建が続けられていた。すなわち、廿三代神主の重儀の時代には、宝殿と楼門と二之鳥居が、廿六代定勝の時代には廻廊がそれぞれ新築されている。

ところが、再建事業もようやく終らんとしていた天保十四年（一八四三）十月廿日の夜、再び火災に見舞われ、本殿・拜殿・権殿などを悉く焼失してしまつた。定勝は、廻廊を新造したもの、再び火を出したことに深く責任を感じ、百万方を尽して再建計画を進めようとしたが、これまでの再建に費した経費のこともあつて、再建費用は武万圓にも及び、なかなか思うように基金は集まらなかつた。

そこで定勝は、これまでたびたび援助を受けていた丸龜藩京極家に寄付金を懇請すべく丸龜に赴いた。しかし、丸龜藩も、幕末の経済変動の激しい折柄、財政的に余裕のあるはずはなく、藩主京極高明は、定勝の再三の願いにもかかわらず色よい返事をしなかつた。このため、思い余つた定勝



沙沙貴神社全景



沙沙貴神社本殿

観音正寺と 人魚

滋賀県の湖東地方には、聖徳太子を開基とする寺院がきわめて多い。これは、湖東地方が、聖徳太子と関係の深い渡来系の人々によつて開発されたためと考えられる。なかでも、湖東平野の中央に聳える織山に建立されている観音正寺は、教ある聖徳太子開基伝承寺院の盟主的存在であつた。この人魚の話も、観音正寺と聖徳太子との関係が、いかに深いかを示さんとした伝承である。

聖徳太子は、仏法興隆のために諸國を遍歴されていたが、ある日暮、叡山山麓の湖辺を通り過ぎんとすると、生い茂る葦のなかより人の呼ぶ声がかすかに聞えた。思はず太子がその声の方を振り向くと、その顔は人の如くであるが、その体には魚の鱗が一面に張りついて人とも魚ともわからない奇異な容姿の人魚が湖のなかに見えた。その人魚が申すには、「私は、堅田の浦に住んでおりました漁師でございますが、仏法を信せず、殺生をこととして暮しておりましたため生を愛してこのような醜い姿になり果てました。どうか、聖者の御慈悲によつて、私

をお救い下さいませ」と、太子に哀願した。それを聞かれた太子は、哀れに思召され、「いったいどうすれば汝を救うことができるのか」と尋ねられた。すると人魚は、「願はくば、此地に伽藍を建て、大悲の像を安置して下さいませれば、私は、苦道を出て天上に再び生れ変わります」と答えた。そこで、太子は、ここを有縁の地と思召され、この地に伽藍を建立され、みずから左手の観音像を刻み安置された。そして、七日の間誦経して人魚の菩提を弔い、成仏のために供養された。その満願の日、天人が天上より降つてきて太子を拝して、「我生天中受勝妙楽」と唱えて、



人魚のミイラ（平成5年焼失）

は、嘆願書をしたため、齋戒沐浴ののち、衣冠束帯に身を正し、嘉永二年（一八四九）七月朔日の私暎、丸龜の海に身を投じて自殺してしまつた。時に行年四十八歳であつた。

このことを聞かれた京極高明は、いたく感しられ、定勝を丸龜の遍照寺に手厚く葬るとともに、直ちに普請奉行を派遣し、速かに再建事業を完了させたという。現在の本殿・権殿・拜殿は、この時に再建されたものとされる。

※1 聖徳太子の遺骸は、天保の火災にも焼失しなかつたよふであるので、この重慶の時代、おまの重慶年間（一七五二〜一七六四）頃の建立と考えられる。

※2 権殿の焼失は、弘化五年（一八四七）濃霧の被害による。

「私は、聖者の御修法によって、めでたく初剎天に生れ変わる事ができました。その御礼のため天上より降りてまいりました」といって飛び去っていった。

聖徳太子が人魚のために築かれたその伽藍が、西国三十三番札所として有名な観音正寺である。現在、観音正寺にはこの時の人魚かどうかは明らかではないが、人魚のミイラと称されるものが伝えられている。

※1 三尊像には、三尊河有、物異形如し人非し人如し非非し無ことある。

お茶子地蔵

どんな小さなお城にも、抜け穴と埋藏金の話が残されているが、女性をめぐる哀れな物語もまた、お城にはつきものである。

お茶子は、観音山寺の麓の家族の娘であった。あるとき、鷹狩の帰途、その村を通った観音寺城の城主の目にとまり、召し寄せられて御室となった。美しいだけでなく、才智にもなっていたお茶子は、このほか城主の寵愛をうけ、一

人の若君をもうけた。あまりの寵愛ぶりをねたんだ正室や他の女たちは、しめし合わせてお茶子を誂し入れようと城主に、いろいろと讒言した。このため、お茶

子は罪もないのに捕えられ、腰の物と襦袢一枚をまとっただけで、観音山寺のとある谷の小さな石牢のなかに閉じ込められた。可愛さ愛して憎さ百倍とばかり、城主は、お茶子に一口の食事すら与えなかつたばかりか、石牢のなかへ無数のへびを投げ込むなどの仕打ちをした。このため、お茶子は、飢えと、足や首や胸に巻きつくへびに苦しめられながら、ついに非業の最期を遂げたという。

お茶子の横死のあと、石牢のあるその谷には、夜な夜なお茶子の忍び泣きの声が聞え、山中をお茶子の亡霊がさまよったという。今も、お茶子の死んだという雨がしとしと降る夜には、お茶子の亡霊を見ることもあるという。また、観音山寺に住むアトは、頭が桃割れの形をしていて、人にひどい害を与えるが、これは、お茶子の



お茶子地蔵

怨霊がアトにのりつつたためとされている。

このことがあつてから、いつしか、お茶子のとじ込められた谷をお茶子谷と呼ぶようになった。現在、お茶子谷の山上には、村人たちによってお茶子地蔵とよばれる地蔵尊がまつられ、お茶子の霊を慰め、その菩提が申われている。

なお観音寺城には、落城の節城内の女子供が争って逃げたため、多数の犠牲者が出たという女郎ヶ谷という地名も残されている。

※1 おじゃと呼ぶこともある。

※2 六角氏の重臣である伊藤氏の娘ともい、伊藤氏の区記を、このお茶子の死に起因するとする説もある。

十三仏の由来

標高三七〇メートルの箕作山から南方に突き出た尾根がある。この山の山頂には、巨岩が繁々と重なり、その奇観は、見る人を圧倒するものであるが、この巨岩の一つに十三の仏像が彫刻されているという。それ故、この山は、岩戸山十三仏と呼ばれているが、速くより見るとその形が兜のようでもあるので兜山とも称されている。

推古天皇の時代、聖徳太子は、摂津国四天王寺の瓦を、この箕作山の麓で焼かれたが、その因由で、太子は、この箕作山の山頂に一寺を建立された。これが瓦屋寺であるが、その建立の折節、太子がなげなく、南の方を望まれている

と、不思議にも、岩戸山の山頂に紫雲がたなびき、岩から金色の光が放たれているのを見られた。そこで太子は、あの山は、きつと靈山にちがいないと思召され、参詣のため直ちに山の麓に向かわれた。そして、牛の尾という山に登れんとすると、牛の尾という処に、こんこんと湧水が湧き出た。太子は、このような山の中でといふかしがられたが、これもより見るとその形が兜のようでもあるので兜山とも称されている。

山は、いばらの生い茂る叢林であつたが、一歩一歩踏み分けやつとの思いで山頂に着かれた。頂上に立つと、まさに靈山にぶさわしく巨岩が重畳としていただけでなく、眼下には西方浄土とみまがうばかりの美しい光景がひろがって



石仏

いた。太子は、たいそう感激され、この岩に仏像を彫刻せんと思召されたが、あいにく、彫刻をする道具をもたれなかつた。そこで、御爪にて、金色の光が放たれていたと思わる靈石に、不動明王・釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・地藏菩薩・弥勒菩薩・薬師如来・観世音菩薩・勢至菩薩・阿闍如来・大日如来・虚空蔵菩薩・阿弥陀如来の十三仏を刻まれたという。そして番外として更に、善光寺如来・弘法大師・八幡大菩薩の三体を脇に刻まれたという。

それ以後、近在近郷の老若男女が、ひきもきらず参詣し、毎年、四月二十四日には、盛大に十日会が行われている。

景清伝説

源平の争乱に際し、並みはずれた怪力の持主として勇猛を馳せた悪七兵衛半景清にまつわる伝承は、全国各地に残されているが、この安土にも、いくつかの景清伝説が伝えられている。

景清道

この道は、叡山の山麓を巡り、鳥打峠を越えて瓢箪山古墳の裾を通り、尾張道・御陵道より八丁縄手を経て、浄蔵院の裏門から近江八幡へ抜ける道であるが、鳥打峠より瓢箪山古墳へ下らないで、そのまま叡山の中腹を桑實寺へ抜ける道も景清道とよばれている。

この景清道は、景清が、平氏再興の祈願をするため、尾張国より京都の清水寺へ通つた道とも、寄寓していた近江八幡の旅庵寺より桑實寺の薬師如来に、眼病平癒のために日参した道ともいわれている。下豊浦加賀の鐘撞田という地名は、景清が、桑實寺へ日参している折、この地に到ると必ず桑實寺の曉鐘が聞こえたために、この名がつけられたといわれる。

景清道は、人里離れた山の中や、田の畔のようなどころをくねくね曲りながら走っているが、これは、景清が、関所を通過せずに通行しようとして作つたためとされている。湖東地方の主要道である中山道(東山道)が、内陸部の村々を結ぶ道であるのに対し、この景清道は、湖辺の村々を結ぶ古い道として古来より重要視されてきたが、とくに、中世、各地に関所が設置され、往来が妨げられるよう

になると、間道としての役割が強くなり、このような伝承が生まれたのであろう。景清道とは、陰道が転訛したものと考えられている。なお、景清道は、鳥打峠から瓢箪山古墳へ下る道は、土砂流のため崩壊が著しいが、石寺から鳥打峠・鳥打峠から桑實寺へ抜ける道は、所々に石段が残されており、古道の面影をよくとどめている。

景清身丈石

桑實寺本堂の山手に、三つの小さな社が建てられているが、その社への参道口付近に、大人の背丈ほどの石が立てられている。これは、景清が、桑實寺へ日参していた節、記念のために自分の背丈と身体を留めた石と伝える。しかし、現在の石は二代目で、もとの石は、本堂横の池に建てられている弁財天社が、天保年間に再建された時、その橋材に使用されてしまった。もとの石は、長さ八尺五寸(約二メートル八〇センチ)、幅二尺五寸(約八二・五センチ)の方錐形をなしていたという。

背丈石をさらに少し進むと山側に小さな籠室が穿たれ、清水が湧き出ている。この清水は、目洗いの水といわれ、景清が眼病をわず

らつた折、その平癒のために使用したとされる水で、古来、眼病に効く薬水として多くの人が参詣したという。

袈裟斬り地蔵

上豊浦の村の中に首のない地蔵尊が安置されている。これは、景清が、桑實寺に日参している折節、その地蔵尊が、景清の心を探るため、「鳥も通わぬ景清道で白状させた事許り」と俗謡に詠われている如く、景清道のとある山中で、容貌殊に端麗

なる女性に化身し、景清を誘惑したが、景清はいささかも動じないどころか、さては妖怪の化身かと、腰に差していた太刀で、その女性が地蔵尊の变化とも知らず、一刀両断のもとに袈裟斬りにしてしまつたためであるという。景清のため首を落された地蔵尊は、「己の首を探したりし者は、幸福に酬ゆ」と、いまだにその首を探しているという。

※1 平景清は、平氏の侍大将で、寿永四年(一一八五)、讃岐国屋島の戦いに源氏の善房屋十郎と戦い、善房が流石心とするや鎧をつかんで引断ち、之を薙刀にかけて、「是は景清なり、誰ぞ来りて死を承せざる」とさげ、敵を求めたという剛の面である。

※2 能は、景清が目を潰し、首目のを奪はつて、金圍を放逐するといふ断髪してら



袈裟斬り地蔵尊